

Oakley, B., Knaflo, A., Madhavan, G., and Wilson, D. S. (eds.), *Francisco J. Ayala (fwd.) Pathological Altruism*

小山 高正

一 病的な利他的行動 (pathological altruism) になぜ取り組むのか

アメリカの遺伝生物学者フランシス・J・アヤラ (Francisco J. Ayala) は、この本の序文の中で次のようにいっている。「他者の幸福や利益を配慮することが利他的性の定義であるとすれば、pathological altruism は言葉の上で矛盾があるように見える。しかし、ある行動がその人が配慮している人を害してしまうこともあるし、行動を向けている人以外の第三者への利益を意図する場合がある。ニューヨークの双子ビルを破壊したテロリストはイスラムの利益をきっと思っていたのだろうか。」彼が指摘

するまでもなく、本書のタイトルは読者に認知的葛藤を生じさせ、一体何を意味しているのであろうかと考え込ませてしまう。しかし、相次ぐ自爆テロを経験し、自己を徹底的に犠牲にしながら目的を達成しようとする行動をどのように理解したらよいのかに苦しんでいるとき、このタイトルは謎を解く鍵を与えてくれる。

本書の編者らは、工学、心理学、生物工学、進化生物学の専門家たちである。掲載されている三十一編の論文は、心理学者、精神医学者、哲学者、法学者、社会福祉学者、宗教学者、経済学者、情報処理学者、生物学者、神経生理学者ら四十四人によるものである。利他的性の病理の問題が多岐の分野にわたっていることがここからもわかるであろう。著者の中には、大学院生が少なからず含まれていて、とくに若い人たちに注目されている話題であることがうかがえる。

二 本書の構成

編者の一人 (Barbara Oakley) は、この一〇年、利他的行動 (altruism) の研究が

進み関心が高まり、神経科学 (neuroscience) や遺伝学 (genetics) でも研究が進んできたが、西欧では、利他的行動に重きを置きながら、その関心は肯定的な面ばかりに集中し、負の側面に注意を向けてこなかったとしている。ここでは、「病的な利他的行動 (pathological altruism)」を「利他的行動に誠実に志向するが、結果的に援助しようとした人やグループに害を及ぼす。それはたびたび予期せぬ方法で他者を害し、他者を利他的行動の犠牲者にする」と定義している。われわれは潜在的に負の影響があるものとして利他的行動を見るのが大切である。それによって、さまざまな複雑な問題を解決する上で、新しい驚くべき価値のある見方が生まれる。一方、研究者は利他的行動の負の側面を調査することに尻込みする。しかし、それによって人びとを利他的行動から引き離すことはい。自爆テロに見られるように、利他的行動が事態を悪くすることを自覚するほうが得られる利益は大きいであろう。

さて、本書は六つのパートから構成されている。それらは、①心理学的次元(四)、

②精神医学的次元(五)、③社会的現象の次元(二二)、④文化・進化学的次元(三三)、⑤発達の視点と背後にある脳内の神経処理の次元(四)、そして⑥まとめ(三)であるが(カッコ内の数字は論文数)、つまりその五つの次元(視点)から病的利他性をとらえようとしたといえる。

三 五つの次元からみた病的な利他的行動

(一) 心理学の次元

心理学の次元から、まずは共感に基づく罪悪感(empathy-based guilt)の問題と共依存(codependency)の問題が提案されている。利他的行動の心理学的な支えは、共感する心である。しかしながら、他者を不幸にしたことが自分のせいだと信じてしまうような誤った因果関係に支配されてしまったために、共感に基づく罪悪感が病的になる場合がある。例えば、生き残ってしまったことを責める罪悪感(survivor guilt)をもつ戦争帰還兵は、自分が仲間を殺したことに悩まされる。また、薬物依存や配偶者・高齢者への虐待を理解する上で重要な概念に共依存関係がある。共感が利他

的行動の出発点として協同活動をうながす一方で、自己犠牲性によって耐えられる以上の苦痛を受け入れるようになってしまうことがある。共依存関係のような機能不全行動は、そのような共感のもつ負の側面から理解されうる。

さらにもう一つは、ちょっと異なった視点、すなわち言語の問題である。言語はヒトの進化を飛躍的に促したが、その思考と行動を規制することによる負の側面も合わせもつ。「もし助けなければ、悪い人になる。だから、自分にとつてたとえ好ましくなく、有害であっても助けよう。」という思考は(経験的回避、概念化された自己)、病的利他性を生み出す。

(二) 精神医学の次元

精神医学的視点から、独りよがりな公正性(self-righteousness)、依存性、摂食障害、病的動物コレクター(animal hoarding)、そしてウイリアムズ症候群の問題が提案されている。

嗜癖(addiction)の脳内メカニズムが解明されているが、マスコミによく見られるような正義を振りかざす独りよがりの公正

性に基づく「政治的」義憤も同じメカニズムに陥ることがあり、病的な利他的行動を生じさせる。他方、パーソナリティーの特性論からみると、病的な利他的行動は、依存性人格障害(dependent personality disorder)の一つと考えられる。つまり、病的な利他的行動者はあまりに無私となり、他者から利用され、搾取され、犠牲にされる傾向にある。これらは、精神障害の診断と統計マニュアル(DSM III R)にあるマゾ的人格障害の症状に似ている。さらに、社会性が高く共感性も高いが、搾取される傾向のあるウイリアムズ症候群の人たちとも共通するところがある。

正常の利他的行動と病的な利他的行動を区別するのは難しいが、摂食障害を引き起こす要因を考えると役に立つかもしれない。例えば、病的な利他的行動者は、他者を喜ばせる動因、承認を得ようとする動因、批判と拒絶を避けようとする動因が強い摂食障害者と重なる。他方、健康な利他的行動者は、新しい経験に常に心を開く動因、人間的成長への欲求が強いと考えられる。三つ目の病的動物コレクターは、ペッ

トの流行がみられる最近の日本でも問題になつてゐる。彼らは一見動物好きに見えるが、動物に対する衛生、滋養、空間、獣医による手当という要因を欠いていて、動物福祉、家族、環境に与える影響の自覚がない。愛着形成に障害があると考えられている。

(三) 社会的現象の次元

社会的現象の次元には、最も多く一二本の論文が収められている。それだけに、とらえられる問題は多岐にわたっている。たとえば、治療法を巡る医者と患者の関係、そして癌患者の介護という医学に関する問題から、犯罪被害者問題、殉教自爆テロとジェノサイド、海外援助と文化的価値観の違いについての問題などである。すべてを紹介できないので、医学的問題と自爆テロの問題を扱う。

医者はある確実性をもとにして患者の治療に当たる。それを望まない患者（例えば、脊髄穿刺）の意向を、患者にとって何が最善かを知っている者として無視してしまいがちである。医者は、人を助けなければならぬという感覚の行き過ぎによって

鈍らされた判断を患者と家族に押しつけてしまふ。一見利他的といえる行動が、結果として害を及ぼしてしまふ一例といえる。

この問題は患者側にも存在する。たとえば、ガン患者介護の場合、介護を受ける患者にとって有害となりうる。つまり、それが被介護者である患者に望まれない、もしくは嫌われることが起こりうる。介護者は、患者の病状悪化に伴い、家事から雇用にいたるまで、かなりの個人的損失をもとに介護を考えなくてはならなくなる。他方で、患者の方は自覚的負担感 (*self-perceived burden*) によって罪悪感に悩み、不安を感じる。患者が他者からの援助を受け入れることに困難を感じるのは、他者との関係が、援助を受けるよりは、提供される援助に依存していることに負い目を感じるからである。そういう患者は、介護者の負担を最小にしようとして、世話をしてもらいたいという欲求を隠し、介護者の情緒的安心を回復するためには、自分が早く死んだほうがよいと思つたりすることになるというのである。

本書の中では殉教として扱われている自

爆テロは重い問題である。カミカゼ (*Kamikaze*) という英語を用いることで同一視されてしまふ先の大戦中の神風特攻隊との違いも議論しなければならぬし、世界各地に飛び火しているイスラム国問題も深刻の度合いを増しつつある。精神医学者である著者 (Adolf Tobera) の関心は、自爆テロを遂行する実行者の人格特性にあるようだ。意外にも彼ら (八割が若い男性) は中流階級出身で、自ら志願している。宗教的イデオロギーに触発されていることは確かであるが、なんといつても政治的な偏狭主義者 (*parochialism*) であり、強い党派心に支配されている。従順で、信じやすく、共感性が高いことから、自分が所属するグループに極めて利他的に行動する。しかし、それ以外のグループに対しては、ことごとく残忍で、その行動が大きな被害を生じさせる。

(四) 文化・進化学的次元

文化・進化的次元の話題は三つあって、一つは民族的・文化的性格を決めるセロトニンのトランスポーターにかかわる多型第五領域異性体 (5-HTTLPR) の文

化・遺伝子共進化の話、二つ目は病的な利他的行動の救世主効果について、さらにDVを受ける女性の進化的利益の話である。5-HITLERは性格遺伝子と呼ばれているが、西欧文化の個人主義に対する東アジア文化の集団主義は、この対立遺伝子頻度における文化的差異と考えられる。

次の救世主効果は、本書に集録された四本の論文の中で唯一病的な利他的行動の利点を述べたものとして注目される。相手と協力し合えばある一定の利益はあるが、裏切ったときの利益はそれよりも大きいので、裏切りの誘惑が強くなる。しかし、お互いが裏切った場合の利益はほとんどないので、協力するか裏切るかに悩みが生じる。これが、囚人のジレンマといわれるモデルである。裏切りに対抗するにはしつぱ返し (tit for tat) という戦略が有効とされていたが、病的な利他的行動者は頑固な協力者で他者の模倣はしないから、しつぱ返し (TFT) はしない。しかし、裏切り者からは時に模倣を受けることがあり、彼らを協力者に変える可能性が生じる。つまり、病的な利他的行動者の存在が、利己的

行動によって膠着状態に陥った事態の対称性を破り、利他的行動をするものを増やして究極的には利他的行動者を多数にするような、いわば救世主効果をもたらすのである。

DVを受けた女性が暴力的男性と同居を続ける現象を説明する原理をロンドン大学経済政治学校のカナザワ (Satoshi Kanazawa) は示そうとした。そういう女性が他の女性に比べて出産した子どもの数に変わりはなく、一方、有意に多くの割合で男児を出産している事実が目撃された。攻撃的男性は同性間の競争に強いという形質を祖先から受け継いでいる可能性があり、そこから得られる利得が暴力的男性との同居を許容する要因になっている。彼女らは、暴力的配偶者を許容する (心理的利他性) ことによって、遺伝的利益を得ている (進化的利己性) ことになるというのである。

(五) 発達の視点と脳内処理過程の次元
発達の視点と脳内の神経処理過程が五つ目の次元である。利他性を支える共感性は、発達の初期 (一歳) に現れ、養育行動や向社会的行動を動機づける。両親の不

和、離婚、母親の精神疾患などにより、子どもの共感が過度に要求されるような家庭環境においては、子どもの中に病的な罪悪感、不安、人格的不全感が引き起こされて、子どもの発達を歪めることがある。

サイモン・バロン・コーエン (Simon Baron-Cohen, S.) は、自閉症を共感対システム化理論 (empathizing-systemizing theory) から説明した。彼によれば、自閉症は超システム化した男性脳という位置づけがされる。逆に、超共感化した女性脳の持ち主もありえるが、こちら側の人は臨床的事例から漏れてしまう可能性がある。これに関する研究はこれからの課題となる。

編者の一人である、デイビッド・S・ウィルソン (David Sloan Wilson) は最後の章で次のように述べている。「利他的な人が搾取に対して脆弱な構造になっている社会こそが病的なのである。利他的行動が、成功する行動戦略として、利他的行動者を益するようにするために、われわれは多くのことをなし得るのである。」(四〇六頁)そして、「恐らく本書の中でなされている病的な利他的行動の分析は、道徳性や

グループレベルの組織にかかわる形質にも広げられるべきであろう。」(四一〇頁)と結んでいる。今後、道徳性の研究を進めるに当たって、病的な利他的行動の視点が外せないことが示唆されている。

四 モラロジ―研究への示唆

本書で述べられている内容をあらかた見たところで、モラロジ―研究への示唆について考察してみたい。廣池千九郎は、道徳心の発生が自己保存の観念に発している、道徳が自己を益することを基本としていることを認める立場である。^①モラロジ―研究者は、このことを道徳実践の面からも自覚しておく必要がある。なぜなら、道徳の実践は、最終的に「己利を逮得する」レベルに到達することを目指すことが廣池によって示されており、それこそが実践の目標であり、実践者個人としてその成果を判断する基準となるからである。

また、本書(『病的な利他的行動』)の導入でも強調されていたが、利他的行動では動機づけが重要である。同じことを廣池も配慮しているが、さらに利他的行動に移す

手段や方法の重要性を訴えている。^②このことについては、むしろモラロジ―研究から病的な利他的行動研究への示唆となる部分であろう。

利他的行動は必然的に自己の犠牲を伴うものであるが、犠牲そのものにも利己性が潜むことを廣池は見抜いて痛切に批判している。^③いくら犠牲を払っても、真に自己に益することとは何かを理解していないと、道徳の実践(利他的行動)が力を得ず、効果がないことは次の文を読めば明らかである。「すべての人間はかかる〔己利の〕原理を知らずして、無明(ひかりのない)の暗中(やみのなか)に彷徨し、家のためとか、自己所属団体のためとか、もしくは自己の部下のためとかを標榜して、日夜その身を労役して一生を過ごしておるのであります。」(⑧四二頁)

五 結びにかえて

本書の編者らは、西欧では利他的行動の肯定的な面ばかりに注目してきた弊害として、イスラム国のテロ行為を理解できなくなってきたことを指摘していたが、廣

池は、昭和初期の時点において、すでにその弊害を見抜いていた。「因習的道德の実行においては、一面には、部分的もしくは形式的に人間の利益を図りて、他の一面には、全体的もしくは実質的に人間の損害になるようなことをなすも、これに心づかぬことが多いのであります。」(⑧三四六頁)やはりそれは、彼の道徳研究が「道徳は自己保存の本能から発生した」ことを認めながら、慈悲の精神に基づく究極の道徳を目指す立場から出発していることによると思われる。その意味からも、モラロジ―で普通道徳と最高道徳の区別を設けていることの正当性が指摘されよう。これらのことからしても、利他的行動を研究する上で、否定的な面にも注目する必要があることを指摘した本書が、人間の利他性を考えるうえで大きな影響をあたえ得ることは容易に推測されよう。またその際に、仏教用語である「己利」が大事なキーワードになることも廣池の指摘からわかるのである。

注

(1) 『新版 道徳科学の論文』(以下『論文』)

第七章第二項第三節第三目に、「人類の歴史及び現在の社会学的材料に徴すれば、第一に、道徳はその源を自己保存の觀念に発しておるのです。第二に、今日においても、究竟するところ、道徳は自己を益するものであるという觀念が土台となっておるのです。」(③一二五頁)とある。(丸数字は巻数を示す。)

(2) 『論文』五冊目第十二章第六項第九節に、「本文に『己利』とあるはすなわち自己の利益ということでありますが、この自己の利益ということが現代人のいわゆる利己主義とは異なるのであります。すなわち聖人のいわゆる利己主義は最高道徳によりて自己の最高品性を完成することであります。この自己の品性完成のほか、自己の利益となるものはないのであります。」(⑤三三〇頁)さらに、『論文』八冊目第十四章第三十一項第二節には、「妙法蓮華經序品の中に『己利を速得す』という語ありて、聖人の教えにおいては自己の最高品性を完成することが自己を利することになると教えられておることは御承知と存じます。およそ真に自己を利益するものは学力・知力・金力・権力もしくは腕力等ではなくて、自己の最高品性であるのです。かの学力以下の人間の力というものはある場合にはこれを失うことあり、且つ身死すればこれを棄ててこの世を去らねばならぬのですから、真に自己の所有物というを得ず、且つ真に自己を利するものというを得ぬのです。」(⑧四一一頁)と解説されている。

(3) 『論文』八冊目、第十四章二十一項「最高道徳は全体的に他人の幸福を進むることを目的とし、且つその動機・目的及び手段を重要視す」という項目が設けられており、利己心に立脚した因習的道徳では、全体的に損害を及ぼすことを指摘している。それゆえ、『論文』九冊目にある「最高道徳の大綱」八章の十六にも、「動機と目的と方法と誠を悉す」(道徳に動機と目的とを尊ぶことは従来すでに決定しておる問題であれど道徳実行の方法に重きを置かなかつたために、道徳実行の結果が好良でないことが多かつたのであります。)(⑨三三五頁)と述べて手段・方法の重要性を喚起し、実践上の注意点を明示している。

(4) 『論文』八冊目第十四章追加分(六五)利己的本能に関する重大なる注意に「種々の犠牲を払うことは利己的本能のままに出来るものであつて、心の立てかえなくても出来るものである。故にそれだけにて大なる徳を養うことは出来ぬのである(最高道徳の人々にはかかることをなすくらいは、いずれも行い来たつておる小道徳の一つである。)(⑧四三二頁)とある。

謝辞

本稿を批判的に読み、的確な指摘をして下さつた立木教夫麗澤大学教授にこの場を借りて感謝いたします。

[2012: Oxford University Press]